

第29回『教行信証』に学ぶ会 講師：延塚知道先生 【ライブ版】

2024(令和6)年8月1日(木) 会場 円徳寺

講題：『教行信証』 信巻 三一問答・字訓釈 源信引文の意義

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。
大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。
自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇すること難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

えーこんにちは。この暑い中をようこそお集まりくださいました。ありがとうございます。
昨日まで私は札幌に居りましたものですから、この暑さが堪えます。札幌は四日居りましたが、四日間のうちに二日は雨でしたから、夜窓を開けると寒いくらいでした。

ところが九州はこの暑さでしょう。あーなんかねえ、頭がくらくらとするのやわ。(笑) あんまり寝てないしねえ。頭がくらくらしますけど、まあまあ頑張ってお話をさせていただきたいと思いますが。このねえ、私事で誠に恐縮ですけども、また安居(あんご)の本講をやることになりました。この間講師の会で、いきなり総長が「先生にお願いいたしたく存じます」と言うから、「はあっ？」って言うたけど、「はあっ？」で言うたけど、「まあ、山命でございますので、大変光栄でございますから、お引き受けさせていただきます」と言うたら、今度は参務以下が、「はあっ？」で言うとした。(笑) まさか引き受けるとわ。来年はもう決まっておりますので、再来年なんです。だけど来年一年で本書かないといけない。だから安居というのは実質三年かかる。一年で本書いて、次の年に安居があつて、終わると今度は全国を秋安居で回るから、三年かかる。

それで、この間終わったばかりなのに、まあそう言うから、まあ事情があるんでしょう。まあしかし光栄な話ですから、「あー結構でございます」と言うたら向こうも、たぶん、一回では引き受けてもらえんやろうから、その時はどう言おうか、こう言おうかいうて、考えて来とつたんでしょうね。「光栄でありますのでお引き受け致します」と言うたら、「はあっ？」と言うてまし

たから、(笑) まあ、あのそれこそ光栄です。ですからまあ、来年一年全くそういう予定をしてないものですから、スケジュールがいっぱい詰まっておるのですけども、まあその間に本を書いて、また、勉強すると、まあ嬉しく思っています。

えー、二週間講義ですから、いいですよ来ませんか？ 二週間びっちり講義すると仏さまのようになりますよ。(笑) いやほんとほんと。「安居病」というて、日ごろほら、この娑婆で生きとるでしょ。ところが二週間きちっと泊まってね。そして、まあときには酒飲むにしても、聖典を開いて明日の予習をし、復習をしてると、二週間要するに仏法漬けになるわけですよ。そうするとその、この気持ちといい体といい、ものすごく楽になるという。それを安居病と言うんですけどね。それで、何年も何年も来る人がおるわけです。だから一度来てみるといいかもしれませんね。病気になって帰るかもしれませんけど。(笑) まあまあ、そんなことで、大変光栄だと思っております。

まあ皆さんと今この「信巻(しんのまき)」の「三一問答」というところに入っていきます。これはね、これまでも何度も勉強してまいりましたように、先ず伝統的に言えば、龍樹が「信方便の易行」と。いわゆる、自力の菩薩道に対して、信心によって阿耨多羅三藐三菩提、つまり覚りを得る道があるんだということを、龍樹は表明するわけですね。そしてそれを、今度は、世親・曇鸞と引き継いでね、そして皆さんと一緒に拝読したと思いますが、親鸞聖人と法然上人の師資相承(ししそうじょう)の時に、一体何が問題になったかということ、念仏一つに立っておられた法然上人に対して、もちろん念仏一つでいいんだけど、しかし、仏さまの覚りの世界は念仏によって開かれるのではなくて、念仏を信じる、信心に開かれると言うべきではないでしょうか。おそらく親鸞聖人は、そう法然上人に言ったに違いない。法然上人もその通りだと認めて、信の座、行の座を設けて、どっちかに座りなさいと、「信行両座の決判」がありましたね。あの時に、法然門下の中に座った人は4～5人でしたけれども、信の座に座った。そういう伝統の中で、親鸞聖人は、信心に覚りが開かれるんだと。

このね、覚りが開かれるということ、浄土教を勉強してきた人からいうと、なんかどうも違和感があると、こういう感じがするかもしれませんが、『教行信証』は、これは大乘仏教の大きな、天台宗、『法華経』を中心とする自力の仏教に対してね、『大経』の他力の仏教を表明しようとするのが『教行信証』ですから、大乘の覚りが手に入らないようなものは大乘仏教じゃない。そうですよね。だから、『大経』は二つ。「帰命尽十方無碍光如来」、世親はこう言いますね。もう一つは「願生安楽国」。『大経』は「帰命尽十方無碍光如来」ということを明らかにする部分と、「願生安楽国」という、これは後半になります。「三毒五悪段」から以降ですけれども、「願生安楽国」ということを明らかにする部分と、『大経』は二つに分かれてるから、世親もそれをよおく読んでね、二つに分けて信心を表明します。わかりますね。「帰命尽十方無碍光如来」。「尽十方無碍光如来に帰命する」。読み下すとそうなりますね。ですからこれは、「一心帰命」の信心の表明ですね。「私は世尊がお説きになられた、『大経』でお説きになられた尽十方無碍光如来に帰命します」と、こう表明した。ですから、これは信心の表明ですよ。

ところが「信心の表明が実はそのままご本尊です」。書いとろうが、どっか。(お内陣に) どっかあるはずや。「帰命尽十方無碍光如来」。ご本尊ですね。つまり「信心がそのまま如来なんだ」と。これが『大経』の持っている、まあ秘密やな。わからんとこです。『大経』という経典が持っている特質。性質。親鸞聖人は、前にも申しましたように、

竊（ひそ）かに以（おもん）みれば、難思の弘誓は難渡海を度する大船、無碍の光明は無明の闇（あん）を破する恵日（えにち）なり。

（「総序」、東聖典 p 149、西 p 131、島 p 12-1）

と、こう言われました。ですから、この仏さまのはたらきを本願と光明に分けて了解するのは曇鸞の『浄土論註』です。ね。曇鸞の『浄土論註』の「不虛作住持功德」のところに、皆さんも勉強してわかるように、どこ開けますか、「行巻（ぎょうのまき）」にしようか。「不虛作住持功德」は『教行信証』に二か所引用されている。そういうことも知っとかないけないよ。

一か所は「真仏土巻（しんぶつどのまき）」。「真仏土巻」ということは仏さんそのものや。ね。もう一か所は、「行巻」の「誓願一仏乗」。覚りの所。だから、いずれにしても、「真仏土巻」も「行巻」の「願一仏乗」も、いずれにしても、仏さまに覚りの所に「不虛作住持功德」を引用している。そういうことをよく知っておかないといけません。今はどこを見ましょうか。「行巻」を見ましょうか。もうここはあんまりくどくど言ってもしょうがないかもしれませんが、198ページね。もう必要なところだけ読みましょう。198ページの終わりから1行目にね。

言うところの不虛作住持は、本（もと）法蔵菩薩の四十八願と、今日阿弥陀如来の自在神力とに依る。

（西 p 198、島 p 12-45）

これは、「今日阿弥陀如来の自在神力」というのは、「尽十方無碍光如来」の光明、今日の光明に依る。

願もって力（りき）を成ず、力もって願に就く、願、徒然ならず、力、虚設ならず。力・願相符（かの）うて、畢竟じて差（たが）わず。かるがゆえに成就と曰（い）う。

というように、世親が「尽十方無碍光如来」、仏さま、それを上げたんだけど、親鸞聖人は仏さまといっても、実は本願と光明ですよ。こっち（本願・因力）が因の本願で、こっち（光明・果力）が果の力。果力、因力。因が果を呼び果が因に酬（むく）ゆとって、二つのはたらきによって、如来を表した。これは曇鸞大師ね。だから、親鸞聖人は、その曇鸞大師の領解をいただいて、「竊かに以みれば、難思の弘誓は難渡海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。」と、こう『大経』の信心を表明したわけですね。しかし、いずれにしても、よく見ると「信心が如来だ」と言っているわけです。

ね、皆さんどうですか？ 私の信心は如来の世界を開いているんだと。もしそういう人がおったら私と変わって講義してください。（笑）ね、いずれにしても、信心が如来だから、凡夫のまんま救われるんです。そやね。そういうふうに、『大経』の「一心帰命」の信心は、実は信心が如来なんだという不思議なことが起こると。ね、ここに、こちら側に、今言う、仏さまの世界である「大涅槃」と言ってもいいし、あるいは、私達の二の分別ということから言えば「一如の世界」と言ってもいいし、あるいは、龍樹に則して言えば、「空」と言ってもいい。あるいは『大経』の「如来」と言ってもいい。いずれにしても、これは「涅槃、一如、空、如来」と、こういう世界を信心が開くんだというのが『大経』の核心なんです。そこに「大乘仏教」という意味があるわけですね。

ところが、ここまでいいですね。だから「一心帰命」のところに、龍樹が言うように、信心に仏さまの世界が開かれるんだと。こういう感動を持つ。覚ったというわけにはいかんけども、ね、私がいつも申し上げるように、覚ったわけじゃない、凡夫のまんまで大きな仏さまの世界に生かされとる。こういう感動をいただく。それが、仏さまの世界を開くんだという意味で、

「一心帰命」のところにね、涅槃の覚りに包まれたという感動をいただく。ここは大事なところですね。わからなくてもいいから、親鸞聖人が言うことを何度も聞いてもらえん。今すぐわかれとは言わん。けど何度も聞いてるうちに、段々ボケてくるから。(笑)そうすると、申し上げたように、私の妻は、自我も弱っていき、体も弱っていき、力も弱っていく。そうやっていくと、もともと生まれた時の、自我が生まれていない前の、仏さまの世界の方が立ち上がって来る。仏さまの世界に会ったんだと。絶対に仏さまの世界にあるということが確かにわかってくるから。親鸞聖人の言うことは、絶対嘘言うてないからね。わかってくると思います。

そして、ところが、せっかくね、仏さまの世界に包まれたという感動を持って、聖道門のように覚りを悟ってしまったというわけにいかんから、この煩惱の身が死ぬまで消えんからね。だから煩惱の身の、欲望の一つ一つを、今度は念仏生活の中で照らして下さって、ね、それが浄土のはたらきです。私達の宿業の身が持っている問題を、一つ一つ、仏さまの智慧によって、浄土として開いて下さっている。だから、念仏生活は、念仏しながら、浄土のはたらきに照らされて、「まあ人間ちゅうのはどうにもならんわ」と思いながら生きていかんとしょうがないかもしれない。それにしても、その全体は、必ず仏さまの世界に向かうんだということがあるわけですね。

ですから、ここでは、また改めて、煩惱の身、そしてそれを照らす浄土。この全体は念仏生活。こういうことが『大経』という経典が持っている仏道の全体になりますね。ですから何と言っても、仏さまの世界に包まれたんだと。これを信心に依って獲得する。これが一番の『大経』の要になるし、また『教行信証』の要になるから、「信巻」にはこの「一心」、信心と本願の三心、これがどういう関係になっているか。

「一心」は衆生の信心ですね。「至心・信楽・欲生」というのは、これは如来の願心ですね。如来の願心は、確かに『大経』の本願文に、

至心に信楽して我が国に生まれんと欲（おも）え、（「至心信楽、欲生我國」：第十八願文）と、こう説かれている。ところがその本願がね、単に言葉で説かれているというよりも、私を生かしているはたらきだと、こう感得した親鸞聖人にとっては、信心が信心の一番深いところは仏さまの世界に通じとる。だから、「一心」、自分の信心をよくよくよくよく、深く深く奥にたずねて行って、ついに如来の願心である「至心・信楽・欲生」、これに突き当たったんだと。だから「至心・信楽・欲生」というはたらきが私達にどういうはたらきをするか。それを述べながら、「一心」に涅槃の覚りが開かれる。これを証明して行こうとするのが「三一問答」と言うところになります。いいですね。

あの～ね、まあ、参考書などを読むと、「一心」が本願力回向の信心だ、本願力回向の信心だということばかりを強調してますけど、そうじゃなくてね、「一心」がなぜ涅槃の覚りを開くのか。これはおおいなる謎でしょ。そしてそこが一番問題になるところでしょ。だって皆さん、僕がお話したように、明恵は「念仏一つで涅槃の覚りが開かれる。そんな馬鹿な事があるか」と。私達が一生、自分達が一生修行して、座禅を組んで、ね、修行しても涅槃の覚りが得られるか得られないかわからんぐらいの難しいものを、修行もしてない凡夫が念仏一つで救われて、そして仏さまの世界が開かれていく。「そんな馬鹿な事があるか」と言って批判するのが明恵ですからね。

だから、いやいやそうじゃない。信心になぜ如来の大涅槃が開かれるかということ、信心と願心との関係の中で明らかにして行こうとするのが「三一問答」になります。わかりますね。だ

から、ここが証明できなかつたら、これは、浄土教は大乗仏教と言えないかもしれない。そういう大きな責任がある場所だというふうに思ってください。大体わかりますね、言っていることは。「はい」(会場から)。若干一名や。(笑) どやねん、法然門下でも四、五名はおったんど。(笑) 頼むぞ本当に。ハッハッハッハッ〜 (笑)。いや確かに暑いから、何を言うとんじゃ、ようわからんと思われるかもしれんけども、まあ、もっと卑近に言うと、「なぜ信心で救われるの？」という問題なのさ。ね、何で信心によってこの娑婆の金やら地位やら名誉やら権力やら女性や男性やと、そしていつも人と比べて、勝ったじゃ負けたじゃ言う世界を飛び越えてよ、比べなくていい世界があるんだと、なぜそんなことが起こるの？ ということよ、簡単に言えばね。

それを学問として言うと、「信心になぜ涅槃が開かれるのか?」。こういうことになるけどね、そこらへんになると皆さん、わかっとる人のおろろうが。じいちゃんやばあちゃん「救われたあ」と思うて、「ああ嬉しい嬉しい」言うて生きとろう。それぞれ。何でそんなことが起こるかちゅうことを経典によって証明しましょうというのが「三一問答」の課題だということになります。いいですか。

それで、ずっと「三一問答」に入っ行って行こうと思うたんやけど、やっぱりどうしても、もうちょっと言っときたいことが一つあって。ということは、知って欲しいことが一つあって。このね、「三一問答」の前に、この「三一問答」はね、皆さんあのここから始まるのよ、223ページのところから始まるさ。

問う、如来の本願、すでに至心・信楽・欲生の誓いを発(おこ)したまえり。何をもつてのゆえに論主「一心」と言うや。 (西 p 229、島 p 12-66)

わかりますでしょ。如来の本願は「至心・信楽・欲生」と誓っているのに、世親はなんで「一心」と言うたのか。こう問うて、それに答えて、

答う。愚鈍の衆生、解了(げりょう)易(やす)からしめんがために、弥陀如来、三心を発(おこ)したまうといえども、涅槃の真因はただ信心をもつてす。

わかりますね。仏さまは「至心・信楽・欲生」と三つ立ててくださってるけども、私達の凡夫にわかるように、天親菩薩はそれをまとめて「一心」と言うてくれたんだと。何故かと言うと、その「一心」が涅槃の真因、涅槃を開くための信心だからである。こういうところから始まって行くわけです。だから、ここから「字訓釈」というものが始まって行きます。これはちょっと今日の後半にやりましょうね。私が問題にしたいのは、その前に『往生要集』の文章があること。

皆さん、七祖の中で源信という方はどんな方だと思う? 天親とか曇鸞とかという方達は、七祖の中で、善導大師もそうやけど、有名やね。ところがどうも源信というと、「ううん、七祖にあげてるけど、どうなんやろう?」っていうふうにわかりにくいと思わへん? それから道綽がわかりにくい。龍樹、天親、曇鸞、これは有名。道綽、善導は有名やけど、道綽と源信ってどうも七祖でどんな役をしたんやろう? 解りにくいと思いませんか? ところが親鸞は、この一番大事な大乗仏教の覚りがなぜ開かれるのか? と言ってもいい一番大事な「三一問答」の前に、源信を持って来ている。

もう一つは、『教行信証』には問答が二つあって、一つは「信巻」の「三一問答」、もう一つは「化身土巻(けしんどのまき)」の「三経一異の問答」。これはやがて「三願転入」に極まっていきます。「化身土巻」の方を見てみますと、「三経一異の問答」が始まる場所に、「三経一異の問答」はね、331ページのところから始まります。ここも問答ですから「問う」と立ててね、『大経』

の三心と」、331ページよ、331ページの御自釈のところあろう。ここに、「問う」とあって、**問う。『大經』(大經)の三心(さんしん)と、『觀經』の三心(さんじん)と、一異いかんぞや。**

同じなのかそれとも違うのかちゆうことです。これを問うとる。そして『大經』と『觀經』、表向きには『觀經』は自力を勧める經典だけれども、裏から言えば本願を教えようとしているんだから、『大經』と『觀經』は表向きには、『觀經』は自力を勧める經典だけ、裏では『大經』の一心に勧めるためにあるんだというふうにして、『大經』『觀經』『阿弥陀經』、この三經の役目をここで問うていきます。それが「三經一異の問答」。こういうところですよ。

それは要するに、どう言うたらええやろうか？ 自力を生きる人間が、私達毎日自力で生きてない人おらんやろう。ね。なにがあっても、やっぱり頑張って努力して解決していこうと。出来ん奴はちょっとやっぱ人間として出来が悪いと、こう言われるわけや。もう僕みたいにそう言われるんだ。自力を生きる人間がどうして他力に目覚めて行くの？ これ大問題やろ？ ねえ。これは私達のこの具体的に生きとる世界で問題になるのは、自力しかない人間がどうして他力に目覚めるか？ こら不思議や。だから自力を生きなさいと、頑張んなさいと、『觀經』で自力を策励しとる、励ましとる。自力で頑張れ！言うて励ましとる。ところが自力で頑張っても、これはお釈迦さまやぞ、僕はお釈迦さまやないからな。けど、お釈迦さまは覺りを悟っとんのやから、自力で頑張るとつても、人間の自力ちゆうのは欲の塊やろうが。自分で気が付かんでも欲の塊やで。なあ。何んか下心があるか、野心があるかやぞ。なあ。(笑) そんなこと言い出したら切りがないからもう言わんけど、わかるやろ言うとは。

その欲の塊の人間が、何でね、他力に目覚めて行くのか？ それは、お釈迦さまはまず、何でもいから頑張んなさいと言ったわけよ。一生懸命頑張んなさいと。そうすると、欲を募らせて頑張るしかなかろうが。なあ。それはお釈迦さまの目から見たら、これ欲の塊の人間が欲を募らせて何とかしようとしているわけやから、必ず挫折するのはわかっとる最初から。わかっとるやねえ。人間はわからんから一生懸命頑張るわけさ。ほんで、何でこんな目に遭わなあかんねんとこう思うけど、お釈迦さんから見たら、それも欲の塊の人間が一生懸命、誠実に頑張れば頑張る程、ドツボにはまるとわかっとるわけです。だから、最初から頑張んなさいと。こう言っつて『觀經』で勧めてくれている。自力を策励して励まして、頑張れと。

そしたら、韋提希のように自力で頑張って、あの人立派な人やぞ、ああ、なかなか賢い。息子がまあ、父親を殺してしまうというような事件があるけど、あれはなかなか立派でねえ、あのを、隠れて葡萄酒を入れたり、蜂蜜塗ったりして父ちゃんの所に持って行こうが。一生懸命、だいぶ長いこと生きとんのやぞ、あれ。その間に息子がちょっと心変わりしてくれんかなあと思いがら頑張るとるわけや。あれは立派な人がやるこっちゃ。ううん、ねえ。それはそれで努力して頑張ってやったわけさ。そしたらそれがばれたら、もっと今度はひどいことになったわけさ。「お前も一緒じゃ」言うて殺されそうになったわけや。お釈迦さまから見たら、「ほらね」やんか。(笑) 「ね、そうなるでしょ」やんか。そう、それ最初からわかっているから頑張んなさいと、こう言っつてくれているわけや。ところが一生懸命、出来が良くても出来が悪くても、人間の力を励まして頑張ってしたら何とかなると思うとるのが人間やから、出来ても出来なくても頑張るのが人間や。

それはどっちとも頑張ったのはいいけど、ね、結局殺される。あるいは自殺する。そんなところに落ち込んでしまうということを見越して、だから、頑張るという方向を本願の方に向けなさいと言って、心を回しなさいと、「回心」やな。本願の方に立ちなさいと。自分の自力と欲に立つ

とったら結局死ぬぞと。だから心を回して、回心をして本願に立ち直しなさいというのが『観経』の説法やな。

そうやって『大経』、『観経』、『阿弥陀経』の役目がある。『阿弥陀経』はここ（一心願生・願生安楽国）、『観経』と『大経』はここ（一心帰命・帰命人十方無碍光如来）。わかるね、自力を生きる人間が自力では救われない。救われないどころか、むしろ人を殺すか死んでしまうかぐらいになってしもうて、どうにもならん。だから心を回さないと、本願に向きなさい。外向いとる目をこっちに向かせるのや。外向いとる目をこっちに向かせんねん。こっちに向いて見れば、何でこんなことが起こんのやと。死んだ父ちゃんも、殺した阿闍世も、それから私もみんな救われる世界が欲しいと、この命の底から言っとるやろうと。その外に向いとる目を、外に向いとる目は自我の目だから、勝つか負けるかやけど、それをこの命の方に回して、そして、「みんな共にある」ということを実現したいというのが、生きとし生ける者の願いだらうと言って、教えて行くわけよ。初めて自分の命の願いに立ち返って見れば、そうだと、この世を超えて行きたいと。こういう心にお釈迦さまは気付かして、回してくださる。それが『観経』の役目や。そやね。

ところが、さっき言ったように念仏生活に入ると今度は、煩惱の身が消えたわけじゃないから、せつかく仏さまの世界を知らされて、はああ助かったとこう思うたんだけども、気が付いてみるとやっぱり、わかりたいとかわからんとか、あるいは、また人の悪口言ってみたり、比べたらあかんという世界が命の世界なんだとわかってるのに、比べて勝ったとか負けたとか、また元通りになつとる。それをどうして仏さまの大悲は救うのか、というのが『阿弥陀経』の問題になる。

だから「三経一異の問答」も、これは私達が生きるこの世界によって、世界において、化身土だから、化身土は私達が生きる世界やね。私達が生きる世界において、人間が、自力を生きる人間がどうして他力に目覚めて行くのかという道筋は、『大経』、『観経』、『阿弥陀経』というふうにちゃんと道筋が立てられてるんですよということを証明していくのが「三経一異の問答」と考えてもいいです。そうすると「三経一異の問答」は、私達が生きる世界によって、自力から他力へ。「三一問答」の方は、今度はこの、「化身土巻」は俗諦。俗諦ちゅうのはわかる？ 私達が生きる世界だから、私達が生きる世界において、自力から他力へ導かれていくのは、『大経』、『観経』、『阿弥陀経』の經典に依るんですよ。こういうことやね。

今度は、真諦。「信巻」は、さっき言った「救われた」という感動に立った人やから。ね、そして外向いとった目がこっちに向いた人やから、だから、こっち側（真諦）の仏さまの世界にたずねて行って、まず、どこから始まるかという、「至心」から始まる。これはまあ「三一問答」読んだらわかるわ。法蔵菩薩が真実の心で修行してくださった。だから、私たちの真実でない心を全部照らし出してくれる。だから皆さん、南無阿弥陀仏と。この中にもおるやろう。なんまんだぶつの教えに感動した人が。なあ、なまんだぶつの教えに感動した人は、一番最初はやぞ、「今まで偉そうに生きてきたけど申しわけなかった」と。自分の中に真実などどこにもありませんでしたと、仏さまに頭が下がろうが。それが「至心」や。というふうに、自力を生きる私たちが、今度は仏さまの真実心に遇って、自力では絶対救われないということを知って、初めて他力の信心に展開していく。というふうに仏さまの世界の方を開くのが「三一問答」。私たちの娑婆の中で教えを開くのが「化身土巻」の「三経一異の問答」。この二つの問答が『教行信証』の柱になります。核心になります。こちら側（他力の信心）は、仏さまの世界やから真諦。わかりますね。実に実際的なところなのよ。難しいこと言うとんじゃないぞ、いいか。仏さまの世界に頭を下げた人は、

凡夫の身が仏さまになったわけじゃないから、片一方はこの世界に残っとる。けど、仏教わかったんやから、片一方は仏さまの世界に足を入れとる。真諦と俗諦。二本足で立っとるのが念仏者や。そうやね。こっち（俗諦）に偏ってしまうと、それは娑婆の迷いの中に入っとる。こっち（真諦）に偏ってしまうと、それは覚りに入ってしまうと、これよくわからん。なんか覚った言うとるぞ。あれは最近ボケたんじゃねーかちゅう話にしかならん。（笑）せやなくて、仏さまの世界に目を開いた人はいつまでもこの世界に足を着けとる、死ぬまで。けど、もう一方の足は仏さまの世界に着けて、そしてなんとかして仏さまの世界に生まれていきたいと。こういう二つの軸足を持つとるから、化身土の方、俗諦の方、私たちの世界では『大経』、『観経』、『阿弥陀経』。真諦の方、仏さまの世界では、「至心・信樂・欲生」。これはどっちとも「自力を生きる人間がなぜ他力に目覚めていくか？」ということが課題になってる。そういう構造になってるわけです。わかりますね。

そういう大切な問答の前に、なぜか二つとも源信がある。「化身土巻」も、この「三経一異の問答」の前に、330ページ、ここに、

首楞嚴院（しゅりょうごんいん）の『要集』に、（西p380、島p12-163）

とあるでしょ。首楞嚴院というのは源信僧都のことやね。源信僧都の『往生要集』に、

感禪師、懷感（えかん）のことです。感禪師（懷感）の『釈』（郡疑論）を引きて云わくと、源信の『往生要集』のこれは最後の所にあります。一番最後の方にね、源信の『往生要集』を読むと一番最後の所にあるんですが、懷感の『郡疑論』を引いて源信がこう言っとると。

「問う、『菩薩処胎経』の第二に説かく、「西方この閻浮提（えんぶだい）を去ること十二億那由他に懈慢界（けまんがい）あり。」

西の方、浄土、浄土に向かってずーっと十二億那由他までいくと、浄土に向かっているのに懈慢界という世界があると。そして、

意（こころ）を発（おこ）せる衆生衆生、阿弥陀仏国に生まれんと欲する者、みな深く懈慢国土に着して、前進（すす）んで阿弥陀仏国に生まるることあたわず。」と。

本当は阿弥陀の浄土に生まれたいと思うて私たちは念仏生活しとる。にも関わらず、途中で懈慢界ちゅうところに留まって、よっぽどいいとこなんやろなあ。懈慢界ちゅうところに留まって、それ以上進まんようになると。まあ僕らが、まあいらんこと言わんとくわ、そこ書いとる。（笑）いらんこと言うてわかることがわからんようになるから。わかりますね。

「懈慢国土に着して、前進んで阿弥陀仏国に生まるることあたわず。」

億千万の衆、時に一人ありて、よく阿弥陀仏国に生ず」と云云（うんぬん）。

億千万の中で、たった一人ぐらいが、阿弥陀の国に進むんであつて、あと億、億、億、億千、億千、ようわからんけど、億千万から一人抜いた人たちはみんな浄土まで行かんで懈慢国に留まると。そんなことが書かれとると。そして、

この経をもって准難（じゅんなん）するに、 この經典によってよくよく考えると、**生を得べしや。** 阿弥陀の国に本当に生まれるんだらうか？

答う、『群疑論』に善導和尚（かしょう）の前（さき）の文を引きてこの難を釈して、また自ら助成（じょじょう）して云わく、「この『経』の下の方に言わく、「何をもってのゆえに、みな懈慢に由って執心牢固（ろうこ）ならず」と。

どうしてみんな懈慢界に留まって、ねえ、この強い菩提心、それを持たないようになるのか、

ここに知りぬ、雑修の者は「執心不牢（しゅうしんふるう）の人」とす。

要するに、自力。他力に生きようとしたりしても、どっかで自力が混ざると人は、「執心不牢の人」とす。つまり、その執着心によって、強い菩提心がない人と言わざるを得ない。

かるがゆえに懈怠国に生ずるなり。もし雑修せずして専らこの業を行ぜば、これすなわち執心牢固にして、定めて極楽国に生まれん。乃至 また報の浄土に生ずる者は極めて少なし、化の浄土の中に生ずる者は少なからず。かるがゆえに『経』の別説、実に相違せざるなり」と。

という文章が引かれる。そして、これを受けて

しかればそれ楞嚴の和尚（源信）の解義を案ずるに、念仏証拠門の中に、第十八の願は「別願の中の別願」なりと顕開したまえり。

こういうふうに出てきます。つまり、十八願の純粋な信心の人は阿弥陀の仏国まで届くけども、ちよつとでも自力が混ざると人間は全部懈怠国に留まる。

こういう文章が残ってるわけですね。あの、つまり、こういう文章を「三経一異の問答」の最初に持って来てる。これ何かわかりますか？ さっき控室でもお話をしてたんですが、『大経』という経典の特徴は、さっき言ったように、「信心が如来だ」という、これが大きな特徴ね。もう一つは、機の方、衆生の方から言うと、皆さんご存知のように、『大経』は「三毒五悪段」というところがあるね。そして、その「三毒五悪段」は『観経』のようにあれかこれか、自力か他力かというんじゃないくて、人間の自力の煩惱を二つに分けてる。ね。前にも言うたように、「貪欲・瞋恚」と、「愚痴」というのと二つに分けると。これが『大経』の人間観の深さです。実に深い人間観を『大経』が持っているということになります。

前に申しましたが、「貪欲」と「瞋恚」は、これは、私たちの日常生活の全ての欲を表します。わかるやろ、言っとることは。あの、欲の塊で生きとろうが。なんか知らんけど、うちの家内も死んだら何か知らんけどパソコンの中、アマゾンとかもう楽天とかそんなのばっかり入っとる。買い物ばかりしとるんじゃない、あれ。(笑) わけのわからん物をようけ買って、そんでわけがわからん物を買って使い切れんから今度は倉庫に直しとるぞ。そんでわしゃそれ整理するのにたまったもんじゃねえぞ。これ何に使うんじゃないやろうな思うてじーっと考えるけどわからんや。まあ最後には捨ててしまうが。まあそうやって、まあそら欲の塊で生きとるわ。それからまあ、人に期待しよう？ 友達に期待したり、旦那に期待して裏切られて顔にしわができるは、(笑) 期待していい人やったあと思うとったら死んでしもうたは、どうにもならんもう。なんもかんも思い通りにならんことばかり起こる。だから腹が立ってくる。

だから「貪欲」と「瞋恚」は私たちの日常生活の欲全てを包んどる。ねっ、そして時々これは反省ができる。ねっ、うちの奥さんも時々反省しとったわ。本当にあの人はね、もうなかなか立派な人や。「あなた、ジャパネットで、あの安かったから掃除機買おうと思うんやけど、いいかしら」「そらおまえ要る物やったら必要やから買うたらいいんじゃないやねえか」って言うたら、「ああ良かった～！もう注文してるし」やと。「はああ？！」(爆笑)「はあ？！」やし。本当「はあ？！」やで。「ああ良かった～！もう注文してる」。もう本当おもしろいわ。おもしろい。ほいで自分で言うとるわ、「あんまり買うてもしょうがないし、もうバカみたいに買わんとこ！」て時々言うとる。だから時々反省できる。そうやね。人と喧嘩しても夜寝られんで反省しようが。そうして反省して今度は、ああ、あんなこともうこれからすまいと思うけど、また同じことするぞ。

そやけど、反省している根性が自力やというのにはわからんぞ。なあ。だから、反省できる自力、煩惱を第十九願の煩惱と言うんだ。ところが反省している根性が自力やとか自我やとか欲望やとか言うのは絶対わからん。そうやね。だから、反省しても反省してもわからん自力を二十願と言うんだ。だから『大経』の人間観ていうのは実に深い。十九願の煩惱よりも二十願の煩惱の方が深いちゅうんやな。そしてこれは手がつけられんのやと。反省できんのやから。仏教がわかったら「わかったー！」言うて、今度はわかった仏教を自分の手柄にしてやで、そしてもっとわかりたい、もっとわかりたい、このまんまじゃひよっとしたら仏さんになれんのじゃねーやろうかみたいなことを悩んでいくようになる。それは人間の真面目さや。けどその人間の真面目さのところには隠れてる自力はわからんぞ、人間には。なあ。だから、こんなこと言わんでいいのやけど、いいか、普通生きとるときでも、正しい意見を言うときは気を付けとけ。本当、本当。正しい意見を言われると、言われる方は手足を出せないやろうが。ほいたらただ聞いとくだけで辛いかな。ちょっとでやめときゃいいのにかさにきて言うわけや。正しいから。そうすると痛く傷つく。そして恨みに変わる。ということがあるんやぞ。具体的に言えばそういうことを言うとなんやぞ。学問として言うと、反省できない自力は人間にはわからん。いいことしてるときの自力は人間には反省がきかない。正しいことを言っているときは正しいと思ひ込んどるから、だから歯止めがきかない。そうやね。これは、仏さまの阿弥陀如来の智慧しか見抜けんやと説かれてるのが『大経』の人間の執心の深さです。

その執心の深さ、『大経』の二十願の機を七祖の中で初めて問題にしたのが源信です。ね。善導大師は機の自覚はありますが、表向きには専修か雑修かというふうに行の規定です。行が専修であれば100人なら100人とも生まれる。ところが行が雑修の行であれば、自力が混ざってる行であれば100人の中で一人も生まれません。こういうふうには善導大師までは行の規定をしていくわけです。ところがこれが日本に入ってきて、ね、念仏しとるこっち側の問題はどうかと。選択本願の念仏を行じていても行じてる人間が自力やったら、これ空念仏になる。そうやね。回心して南無阿弥陀仏と初めて念仏に目覚めて念仏称える、これはまあ最初はセーフなんや。ところがさっき言ったように、最後には反省できない自力によって一生懸命念仏称えて念仏の数を積み重ねて仏さんになろうとしているような念仏に変質していく。こっちは気づかんけど、気づかない奥の方に、人間の反省が届かんところに自力があるんやから、もうどうにもならん。

だからはっきり言っときます。人間の方からの救いはありません。どこまで行っても二十願の自力なんだから。仏教がわかったと言ってもそれは救いにならん。それは、懈怠界に生まれると書いとる。懈怠界もいいとこなんやぞ。綺麗なお姉ちゃんはおるしや(会場笑)ほんとやぞ(笑)金の鎖で繋がれとんよ。金の鎖てのはすごいやんか。金の鎖で繋がれとるは、ええ、これ、ほんとに綺麗なお姉ちゃんおんのやぞ。それから喰うもの、全部あんのやぞ。そら糖尿になる、そんなとこ行ったら。(笑)けど、全部あんのやぞ。だから、それで欲が満たされるから、こっちの欲が満たされるからそれ以上進まないでそこに座りこんでしまう。つまり、竜宮城が途中にあるわけよ。だから、そこに陥ってしまう。そっから出る人は一人もおらん。億千の中で一人しかおらんちゅうのやぞ。多分僕ら全員、駄目やね。アウト。うん、それは反省できない欲を持つてるから。ね、反省できない欲を持つてるから、こっちから行こうとしても、必ず、「疑城胎宮」という関所に引っかかる。これ、僕は勝手なこと言うてるわけじゃないぞ。親鸞の『教行信証』を読んでごらん。「専修・専心」これが一番素晴らしいと思わへんか。「専修の行」「専心に行じる」ん

だから。だから、専修専心というのが一番優れた行やぞ、人間の。その優れた行も懈怠界に生まれると書いとる、親鸞は。だから、どうにもならん、と。ね。ただ、さっき言ったように、別願中の別願で第十八願ちゅうのが説かれとるから、こっちからはどうにもならんけど、向こうからはそのまま救い取るから心配すなと言うてくれとると。そこに目覚めよと。どおーしても僕は、わかりたいと思うのよ。立派になりたいと思うのよ。ね。わかった人も、反省が及ばない自力を生きてます。わからない人も、反省が及ばない自力を生きています。わかった人もわからん人も一緒、というところに宗祖は立った。だから

いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。

(『唯信鈔文意』、東 p 553、西 p 708、島 p 20-6) と。

だからあの人(親鸞聖人)わからんけど、晩年はただの爺さんやったんちゃうか。あんまり難しいことを言うて、信心が起こさんと駄目やとかそういうこともう言わないでね、ああそのままでもいい、ああそのままでもういい、いい、よろこんどけ。ああ今まで生きてきただけで丸儲けじゃちゅうなことを言うてやで、んーそれでいいんじゃないか。仏さんに生かされて、ね、今まで来た。それをよろこびなさい。それを言い続けたんじゃないかなあと思う。わからん人もわかった人も。わからん人はわからん人で、『観経』によれば、僕が何度も言うように最後には仏さんの方から迎えに来ると書いとる。ね。だから、わかった人もわからん人も、手放しで第十八願が説かれとる。そのまま救うと仏さんが言うてくれとると。それを信じなさい。そして仏さまの世界に、ありがたい、深い恩を仏恩の深いことを感じなさいと、そう言ったんじゃないかと思う。

それを、そういう深い自力を指摘したのは源信です。だから、ここでは、『大経』の往生・『観経』の往生・『阿弥陀経』の往生ってということが説かれてくるから、その前に懈怠界に留まるんですよ、普通の人の往生はと。ね。立派な人の、仏教がわかった人でも懈怠界に留まるんですよという文章を、源信の文章を持ってきます。

「三一問答」の方を見てください。ちょっとごめんね、これ大事なことからよ。(板書)先に言う…あ、まあいいや…んん…(会場から声) ちょっと待て、ちょっと待て、ちょっと待て。ちょっと待て。あの…ちょっと待て。休み時間の前やな、休み時間まだならん。もうちょっと待て。うん、「三一問答」の前ちょっと開けて。それだけ指摘して休み時間にするから。ええつとな、222ページ(西 p 228、島 p 12-66)、はい。ここに、ゆっくり読むよ、いいか

『往生要集』に云わく とあつてね、

『入法界品(にゆうほっかいぼん)』に言(のたま)わく、

これは『華嚴経』の『入法界品』やね。そこに、こう書かれとる。

「たとえば人ありて不可壊(ふかえ)の薬を得れば、一切の怨敵その便りを得ざるがごとし。

わかりますね。例えば、絶対に壊れないという薬を得たならば、一切の敵が、敵にならんと。

菩薩摩訶薩(ぼさつまかさつ)もまたかくのごとし。

菩薩ちゅうのはそういうもんだと。

菩提心不可壊(ぼだいしんふかえ)の法薬を得(う)れば、一切の煩惱・諸魔・怨敵、壊(やぶ)ることあたわざるところなり。

わかりますね。菩薩の菩提心というのが、持っておれば、それは例えて言えば不可壊の法薬のようなものであって、その菩提心さえあればどんな人が来ても絶対に負けない。

たとえば人ありて住水宝珠(じゅうすいほうじゆ)を得てその身に瓔珞(ようらく)とすれば、深き水

中に入りて没溺(もつにやく)せざるこがごとし。菩提心の住水宝珠を得(う)れば、生死海に入りて沈没(ちんもつ)せず。

わかりますね。菩提心というのは、菩薩が持つてる菩提心はちょうど住水宝珠を得る、その住水宝珠を瓔珞にすれば、深い水の中に溺れても絶対に溺れないと。生死海に入っても沈没しないと。つまり生死の海、私たちのこの娑婆を超えていくことができる。そして、

たとえば金剛は百千劫において水中に処して、

この金剛というのは”金剛の菩提心”と、よく使うやろ。だからここに金剛と出てくるのは、これ他力の信心のことさ。なっ。

たとえば金剛は百千劫において水中に処して、爛壞(らんえ)しまた異変なきがごとし。

ダイヤモンドは百千万劫水の中にあつて腐らない。ちょうどそういうものであつて菩提心も、

菩提の心もまたかくのごとし。無量劫において生死の中・もろもろの煩惱業(ぼんのうごう)に処するに、断滅することあたわず、また損減なし」と。已上 と。

わかりますね。他力の信心を得れば、これは、この娑婆の泥水に溺れない。そして、他力の信心を得れば、違見(いけん)・違学(いがく)・別解(べつげ)・別行(べつぎょう)の人たちが攻めてきても、絶対にそれにも負けない。他力の信心こそ絶対にこの世を生きていく大切な信心なんですよということを源信がここで言っている。いいですね。だからこれから他力の信心の、金剛の信心の中を尋ねていくんだから、これはこれでいいね。ところがその後にもまた、

また云わく、我またかの摂取の中にあれども、煩惱眼を障(さ)えて見たてまつるにあたわずといえども、大悲倦(ものう)きことなくして常に我が身を照らしたまう、と。

これいいですねえ。お一、そうそうそう。どこまでいっても、私たちはさっき言った煩惱が抜けない。抜けたと思うとるだけでね、抜けてない。仏教がわかっても抜けない。だから、煩惱に眼障えられて、摂取の中にあつても、仏さんが見えない。けど、そのまんまで第十八願の大悲の方が助けてくださるんだと。こういうふうにして、二十願と第十八願とが重なつとる。そらそうや、二十願の機は反省してもわからんのやから、第十八願に照らされないと自分は二十願の深い煩惱を持っていたとわからん。親鸞聖人も初めて第十八願の智慧に照らされて、

邪見驕慢悪衆生 信楽受持甚以難 (「正信偈」、東p205、西p204、島p12-51)

信心なんて私の中にありませんと。そんなものはどこにもないと表明するでしょ。そのように、二十願の機は、本当にわかったというのは、十八願とこう重なつとると、いうところに二十願の機の大切さがあるんですよという偈(うた)がこの源信の偈です。ね。

だから「三一問答」は、親鸞の立場からすると、私のようなどうあつても救われない者を救おうとするのが法蔵菩薩なんですよと。ここ大事なやけどな。救われない理由と救われる理由が一緒なんや。二十願のどうにもならん、救われない、絶対救われない。だから法蔵菩薩が身を捨てた。だから救われない理由と救う理由とが一緒なんや。それが「三一問答」の中で顕かになっていきます。ですから親鸞は救われたという立場から、救われた信心の中を探ろうというような、そういうんじゃなくて、絶対に救われない者という身が目覚めこそが信心であつて、それをこれから推求していきますよというのが「三一問答」になっているわけですね。この辺は難しいか。難しいことなからうが。ようわかるやんか。わかるやろ。煩惱具足の凡夫だということ初めて五体投地して「なんまんだぶつ」言うわけさ。そこに開かれてくるのが本当の仏さまの世界ですよ。こういう意味で「三一問答」が開かれてくるということ、源信がどっちにもあるわけ

です。そしてこの源信が、いつかも言ったことあるぞ、「三経、三機、三往生、三願」、親鸞の教学を決定的に決めるのは源信なんです。特に二十願の機、これを明確にしたのは源信だから、「三願、三機、三往生」、言ったね、前に言ったぞ。試験に出すから覚えとけて言ったろうが（会場笑）、試験に出すぞ本当に。で、それを開いたのが源信なんだと言ってる。ね。源信って偉いんですよ。すばらしい。

それで、休み時間に入りますが。岡田先生なんやった？

会場：先生、「不虛作住持功」…（音声不明、『教行信証』の二か所の引用についての問い）

先生：はいはい。はい。

会場：それについては、何故お出しになったかということはまだ申されてないように思います。

先生：はい。

会場：それで、

先生：いやいや、あのね。わかった。そこまででちょっと待ってな。あのね、親鸞聖人の『教行信証』は、引文で成り立っとろう。引文でね。だから、その引文をどこに引用してるかとか、それから何故この引用をするかとかいうことによって、親鸞は自分の意思を伝えようとしている。だから、私たちから言えば、この引文はどことどこに配置されてるか。それだけでも重要な意味がある。

「不虛作住持功德」は真仏土の仏さまの世界、仏さまの覚りの世界に引用されてる。「一乗海」もこれも仏さまの覚りの世界に引用されてる。だから「不虛作住持功」をここに持ってきてはいけません。これは仏さまの用（はたら）きです。だから、往相回向、還相回向が説かれていくのは「不虛作住持功」を中心にしてですから、それを衆生のところに持ってきてはいけません。衆生のところは、「証巻（しょうのまき）」やね。「証巻」は私たちの証だから。教、行、信、証の「証」やね。そうすると、これは私たちに関係してる場所やね。「証巻」に引用されてる浄土の莊嚴は、「国土莊嚴」です。「仏莊嚴」、「菩薩莊嚴」は仏さまの分際。「国土莊嚴」は私たちの分際。と、親鸞がまずそう言ってるから、そのことをよく知らないといけない。「国土莊嚴」は「証巻」に引用されてるのは、まず、「妙声（みょうしょう）功德」。浄土は南無阿弥陀仏によって開かれます。それから「主功德」。南無阿弥陀仏を主とした人は、生涯教化をしていきます。それから「眷属功德」。南無阿弥陀仏に頭を下げた人は、好き嫌いを超えて、みんな友よという世界を生きていきます。そして、最後に「清浄功德」。これは、「煩惱を断ぜずして涅槃を得る」ということですから、実は浄土の莊嚴は私たちにはわかるように説かれてるけれども、実は涅槃の用きなんですよというので、わざわざ「清浄功德」、浄土の莊嚴の世親の『浄土論』では「清浄功德」が一番最初にある。ところが親鸞はわざわざ一番最後に持ってきて、浄土というのは私たちにはわかるように法蔵菩薩が説いて下さったんで、涅槃と言っても空と言ってもわからんから、浄土として説いて下さったけども本当は涅槃の用きそのものなんですよと。だから涅槃の用きに触れた人は、みんな仏さまの世界の中にある。

今まであれ嫌いやった、なあ。もう僕も嫌いな奴ばかりやな。最近わかった、好きな人も嫌いな人も、仏教わかった人もわからん人も、全部隠れた自力で覆われてるから、だから、仏教わかったから言うて、わしゃ仏教わからん奴は嫌いじゃ言うて喧嘩して来たんだ今まで。あれあかんかったなあと思っ。やっぱ喧嘩したら損や。ああ、やっぱり離れていくしな。いいか、わかった人もわからん人もさっき言うた、人間が反省できない自力によって生きとるから。だから全

部友だちやと。

いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。(東 p 553、西 p 708、島 p 20-6)
と、こう言って生きていく。だから、「国土莊嚴」の方は、全部、私たちの分際。人間のところで考えましょう。「仏莊嚴」・「菩薩莊嚴」は仏さまのところで考えなさい。これが親鸞の指示です。だから、「往相・還相」は仏さまのところに出てくるから、「不虛作住持功」のところに出てくるから、これは仏さまの世界であって、私たちのこの現実の、教化したいちゅう気は起こんのやぞ確かに。せつかく立派な仏教を頂いたんだから教化したい、伝えたいという気持ちは起こんのやぞ。それは、「現生十種の益」ところで考えなさい。それを「還相回向」だなんて言ったら、おまえ仏さんかちゅう話になっちゃうから。だから分際をわきまえなさいというので、引用されている引用の場所によって、親鸞聖人がそう伝えてる。その意味で、「不虛作住持功」はこれ仏の分際。「国土莊嚴」は私たちの分際として考えましょう。こういうことを岡田先生は言えと言っとるんだと思う。そんでいいのか。

会場1：もう一つお伺いしたいんですが。

先生：うん。

会場2：すいません、すいません。ごめんなさい。ちょっとね、80分超えるとCDで録音が入らないんですよ。休憩とっていただけるとありがたいんですが。

先生：それじゃあ一回休憩とって最後にまたそれ。

会場2：すいません。勝手言うて申し訳ありません。

会場1：いいえ、こちらこそ。

先生：いいですか。それじゃあそれで。それじゃあ一回休憩しましょう。(休憩)

講義 2

えーそれでは、あー難しいですか？(会場笑) けど、少しわかるやろ？ え？ 全くわからんわけじゃなかろう？(笑)(会場「少し」) うん？(会場：「少し面白い」)(会場笑) 少し面白いのか？ う〜ん、いやーなかなか難しいーと思います。あの一仏道の道理をね、推究していく、学問として推究していったるわけだから、これは一あの一、大学の先生でもわからんところなんだ。だから、みなさん聞いたらなかなか難しいとおっしゃるのはその通りだけど、これは僕の責任じゃなくて、“親鸞が” 難しいこと言ってるんで。(会場笑) それをまあ、わかりやすく言えば、しかし、みなさんで考える時には、例えば、もし信仰体験があるとしたら、自分の信仰のところでよく考えると、少しずつ解けてくるかもしれない。

うん。さっき言ったように、あの一、「三一問答」は「字訓釈」と「仏意釈」と分かれてる。で、「字訓釈」というのは、字を一つ一つ、「至心」の「至」は「真実」であるとか、一つずつ一つずつ字を調べて行って、そして、字で、「至心」、「信樂」、「欲生」を規定するのさ。ん？(会場笑) (先生の後ろを通ろうとして「すみません」) いやいや、びっくりした！(会場笑) トランプみたいに撃たれるんかしらと思った。(会場爆笑)

222 ページでしたか？ うん。あの一ともかく、源信の文章が“どっちともある” ちゅうこと

を知っててください。そして、“源信は偉い人や”ということを知っててください。ほで、それは、あの一、また後で、「三一問答」の中に入ってきた時に、あの一、法蔵菩薩のところの問題になることです。つまり、私達の方からは救われる種が無い！どこまで行っても。だから、法蔵菩薩は最後にもう、もうあれさ、手を離れたのさ。「もう馬鹿知らん！」言うて。「知らんけど、どうやって救うたらいいんや」言うて、「わかったー！」ちゅって、自分の身を私達の中に捨てたちゅうわけやな。その自分の身を捨てた理由と、僕らが絶対救われんという理由が“一つ”なわけさ。それが因位の時の、法蔵菩薩のところ、やっぱり大事になってくるから。あ一二十願の機、源信のところ、大事になってくる。後でわかります。(会場：「それをお尋ねしたかった。)」そうそう、その通り。わかってたよ、もうわしは。何を言おうとしてるか。(会場笑)ねっ？

つまり、法蔵菩薩は、不可思議兆歳永劫の間、修行するわけさ。そして、自分がこうやって救おう、こうやって救おうというのがずうっと出てくる。ところが、最後になると、「もうあかん！」ちゅう。これは何ぼ言うてもわからんのやから。だから「もう知らん！」言うて手を離してしまう。そんな時に、「よしわかった！俺が他力の信心になる！」って言って、私達のこの体の中に身を捨てたというのが出てくるんだ。それは、『大経』の中ではない、『論註』の中に出てくるんだ。『大経』の「勝行段」は短いから、そこにはない！

ところが、『論註』の還相回向のところ、それが出てくるから、また、そこに来たら、それをお話するとようわかると思うけど、法蔵菩薩が最後に、岡田先生が言うように、「もう救いようもない者を、どうしていいかわからん！」と。だから、「もういい！お前達、信心もできへんのやったら、俺が他力の信心になって、あんた達の命として、身を捨てる！」と言うわけやね。で、“救われない理由と身を捨てた理由が一緒”なんだ。そこに、「至心・信樂」のところ、そういう場面が出てくるんだ。そこまで行ったらわかるけど、それを曾我(曾我量深)さんは、「救われない理由と救われた理由が一緒なんだ」ちゅなことを言ってるわけや。何のことかわからんのやけど、今言ったことがあるから、そう言うんやけど。えーそこに行ったら、また改めて申し上げますが、岡田先生はいつもそういうことを言いたかったらしい、ということです。

会場：ついでに十八願成就文との関連も、戴きたいと思いますが…、いや、これだけ、これだけです。

田畑先生：いーい？それだけで。

会場：いや、十八願成就文との関連も、あの、もしあるようだったら、お教を願いたいと思っています。

先生：あー、それはさあ、どういう？何を聞いてるかようわからんけど、んー例えば読み方としては、

あらゆる衆生その名号を聞いて、信心歓喜し、乃至一念まで、至心に回向して、

とずっと続いて読んどったのを、

あらゆる衆生、その名号を聞いて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。 ○(まる)打って、

至心に(心を至し)回向したまえり。(「第十八願成就文」東聖典p44)というふうに仮名を打つやんか。打ち替えるやんか。そこにこの法蔵菩薩、私たちの信心じゃなくて、信心といっても、私たちの信心じゃなくて、法蔵菩薩が新しい主体として生まれたんですよということを言うために、「至心に回向して」と読み替えた。(会場：「せしめたまえり」と)あー「せしめたまえり」と読み替えた。そこに、身を捨てた法蔵菩薩が信心になって起き上がったんで、「私達の人間

的な感情とか心情ではありませんよ」と言ってる、というふうに、(会場「そうですね。ですからあれは法蔵菩薩のお用きなんですか?」)、そうです。そうです。(会場:「ご回向なんですか?」) そうです!

「至心に回向」という言葉は、第二十願の因願の文と、第十八願の成就文と二つ出てくる。二十願の方は、私たちの「至心に回向して」、さっき言った、一生懸命仏教わかったら、最後まで念仏称えて頑張って仏になろうと、こうするから、だから二十願の方は、「至心に回向して」と言うのは、私達の「至心回向」になつとる。それとは違うんだという意味で、「至心に回向せしめたまえり」と読み替えた。そして、身を捨てた法蔵菩薩が名告り出たんだということを明確にしたのが十八願の読み方になります。(会場:「法蔵菩薩という方が出て来られねばならなかった理由が、そこにあるんですか?」) そうです! そうです! そうです! (会場「わかりました。」) (会場笑) 岡田先生がわかりました言うのは、珍しいなあ。(会場笑) いや、大事なとこ聞いておられます。その通りです。もういい?(会場:「法蔵菩薩因位時という言葉の意味がわかりました。」) ん。だから、法蔵菩薩の因!、法蔵菩薩の因と私達の救われない因がはっきりしたちゅうこと。そこが一緒なんや。そこが、大乘仏教なんやけどな。

ちょっと、つまり、覚りの因と、救われない因と、救う因とが一緒なんや。だから、“転じる”ちゅうことが起こる。凡夫が、凡夫のまま何故救われるかいうと、“転”なんや。阿羅漢の覚りやったら、覚りと煩惱とは別だから、別のもんなんだ。ところが大乘仏教は信心が起これば凡夫のまんまで救われるちゅうのは、元々法蔵菩薩の因、救われる因と、救われない因が一緒だから、“転じる”ちゅうことが起こる。わかるかなあ〜(会場笑)

(会場:「先生、途中で申しわけないんですが、それは、私達の中に、救われないということが出来上がったら、それがわかったら、同時に法蔵菩薩が立ち上がってるという意味ですか?」)

そうです! ですから私達の方でわかったらということは、私達の方からはわからないけども、法蔵菩薩が立ち上がった時に、初めてはつきりする。私のような救われない者を、

信楽受持甚以難 (「正信偈」、東 p 205、西 p 204)、「信心なんてない者を、だからこそ信心になってくれたんだ」と。こう親鸞が言ってるわけです。それは私達に救われない理由なんてわからない。わからないけど、法蔵菩薩が身を捨てたということが教えてくださってるんだと。こういうふうに考えてもいいかな。いいか、それで?(会場:「はい」)

あ、溝口さん何や?(会場:「それが四十八願ということになるんですか?」) おお、そこまでいくと、ちょっとややこしいから(会場笑)、ああ、それが四十八に展開していくんさ。それ、今度は自分の信心にまでなって救いたいと。これが一番の意欲なんや。最初の、最初の意欲。ところが馬鹿だからさあ、僕らは。金に迷うたり、地位に迷うたりして、人を殺したり、自殺したりしようお? そやからこの一番根本の、例えば、幸せになってほしいと、子どもに願う時には、幸せになるんやったらあんた大学出ときよとか、幸せになるんやったら良い人と結婚しよとか、いろいろあるが? そんなふうにして四十八膨れていくんだ。わかる? だから逆に言えば、私達の迷いの方が深いから、その迷いに従って願が広がって行った。だから四十八の願を持っているような仏さんは、阿弥陀如来だけ。他の仏さんは、「四弘誓願(しぐぜいがん)」しかない!

ところが阿弥陀如来だけが四十八も持ってて、全ての人を救いたいと言うのは、阿弥陀如来だけだから、だから、「阿弥陀如来」が「根本仏!」「根源仏!」。そして「根源仏」の因が「法蔵菩薩」。その法蔵菩薩が、皆さんのこの命の中に身を捨てとるから、このクソ暑いのに来るとよ。

(会場：「そうそう！ ね！」)、あーそうそう！ ねえ？ えーわしも来るのよ。(会場爆笑)(会場：「なんまんだぶ」)、そしてえ、法蔵菩薩と法蔵菩薩が、こう喋つとる間に、聞いとる間に、わからんところで感応道交(かんのうどうこう)するから。(会場：「そうそう」)何か難しいてようわからんけど、来てよかったわあ言うて帰るのよ。(会場：「そうそう」)それでいいんだ。(会場：「それぞれ」)うん。それでいいんだ！ それでいいんだ！ あーそうそう。(会場：「あーよかったなあ〜」「よかった」)(会場笑)もう、終わってしもうたやんか。(会場爆笑)いや、本当にそういうことよ。そういうことよ。わかるやろ？ 理屈ではようわからんと。そやけど何か難しいこと言うてようやと。そやけど何か今日、何かこう来てちょっと軽くなったわあとか、このクソ暑いのに来てよかったわあと思うのは、多分、私の法蔵菩薩と、皆さんの法蔵菩薩とが感応道交(かんのうどうこう)し合ってるんや。深いところで。いつかそれわかるから、うん。わかる前に死ぬかもしれんけど、(会場笑)死ぬ時わかるから大丈夫。うん、大丈夫！(会場笑)

うーん、暑いからわけわからんようになってしもうたやないか。(会場：「誠に申しわけございません。」)いやいや、今、おっしゃっているところは一番大事なとこなんです。だから「至心」が終わって「信樂積」のところで、今のことが出て来るわけよ。信心になるって言うんだから。信心は法蔵菩薩なんだから。だから信樂積のところで、今のことが本当の意味で問題になってくる、と思います。

それで、先に進まな、早よ。(会場笑)この「字訓積」はシャッと行こう。224ページ、ちょっと開けてみてください。字を一つずつね、この、まあ今で言えば、辞書で調べながらと言ってもいいかな。言葉の意味を一つずつ言います。(西p203、島p12-67)

まず、**明らかに知りぬ、**とあって、法蔵菩薩の「至心・信樂・欲生」というこの、

「至心」はすなわちこれ真実誠種(しんじつじょうしゅ)の心なるがゆえに、

「真実誠種」、「真実」ですね。そして「誠実」、そして「種(たね)」である。そういう心なるがゆえに、**疑蓋雑(ぎがいまじ)わることなきなり。**「疑蓋」というのは「疑い」、「自力」、そういうものが一切雑(ま)じってない真実の心である。「至心」はそう言う意味である。

「信樂」はすなわちこれ真実誠満(しんじつじょうまん)の心なり、 また、

極成用重(ごくじょうゆうじゅう)の心なり、審験宣忠(しんけんせんちゅう)の心なり、欲願愛悦(よくがんあいえつ)の心なり、歡喜賀慶(かんぎがけい)の心なるがゆえに、疑蓋雑(ぎがいまじ)わることなきなり。

「信樂」は沢山あるね。「信樂」という字を調べてみると、これだけの沢山の意味がありますよと。それから、

「欲生」はすなわちこれ願樂覚知(がんぎょうかくち)の心なり、成作為興(じょうさいこう)の心なり、大悲回向の心なるがゆえに、疑蓋雑(ぎがいまじ)わることなきなり。

この疑蓋雑わることなきというのが、三つに共通しとるね。疑いもなく、それから、えーこの、えーうん、真実で疑いもなく、えーこの、自力の雑じわらない心であるということが三つとも共通しとる。そして、「至心」の「真実誠種の心」というのは、「信樂」の「真実誠満の心」と同じことでしょ？ 意味は。そやね？ 「真実誠種」、「至心は真実誠種の心」というのと、「信樂」の「真実誠満の心」というのと、これ意味一緒だから。だから「至心」は「信樂」のところに収まる。そして、「欲生」の「願樂覚知」というのは、「信心」のところで言えば、「欲願愛悦の心」、これと重なつとる。だから、「至心」「信樂」「欲生」と三つあるけれども、「信樂」一つのところ

に、ねっ、全部収まるんですよという註釈の仕方が、「字訓釈」になります。そして、

今三心の字訓を案ずるに、真実の心にして虚仮雜（こけまじ）わることなし、正直の心にして邪偽雜わることなし。真（まこと）に知りぬ、疑蓋間雜（ぎがいけんぞう）なきがゆえに、これを「信樂」と名づく。「信樂」はすなわちこれ一心なり。一心はすなわちこれ真実信心なり。このゆえに論主建（はじ）めに「一心」と言（のたま）えるなり、と。知るべし。

さっき、字訓で述べたように、「信樂」一つに、「至心」も「欲生」も、「信樂」一つに収まりますよと。だから世親は「世尊我一心」と表明して、「信心に涅槃が開かれる」と、こういうふうに表示したんですよというのが「字訓釈」です。わかりますね？ 大体そう言う意味です。「信樂」のところに収まると。そして、だから世親が「一心」と表明して下さった。こういう意味だと。まあ、あんまりぐだぐだ言わんで、それ位やったらわかろう？ 「至心」「信樂」「欲生」と三つあるけど、「信樂」のところに全部収まるんですよと。だから世親は「世尊我一心」と言ってくさったんだと。だから、「一心」という信心は、これは「衆生の信心」。「信樂」は、これは「仏さまの心」なんだけども、それが一つになつとるということになるね。それがやがて、さっき、ほら、岡田先生がおっしゃってた法蔵菩薩の因のところ、一つになっていくということが後で出て来るから。それで、「字訓釈」はまあ、今のようなそんなに難しいところじゃないわけです。

ところが、今度は「仏意釈」というのが始まります。「仏意」というのはわかるか？ 仏の心、ねっ、そこに225ページに、

仏意測（はか）り難し、 225ページ。（西p231、島p12-68）

「仏意測り難し」と出てこう？ 仏の心は私達のような凡夫ではおおよそ測ることはできませんと。**しかりといえども** にも関わらず、**竊（ひそ）かにこの心を推するに、**この「竊かにこの心を推するに、」というの、「総序」の**竊かに以（おもん）みれば、**（東聖典p149、西p131、島p12-1）ということ、「後序」の**竊かに以みれば、聖道の諸教は行証久しく廢（すた）れ、**（東聖典p398、西p471、島p12-222）という、「総序」と「後序」と、それからこの「三一問答」の「仏意釈」に、「竊かにこの心を推するに、」と出てくる。それ知つていてください。わかるね？ そして、「竊かにこの心を推するに、」この、僕は、すみません、教養があるために（笑）、ちょっと言うんやけど、この「竊かにこの心を推するに」というのは、曾我さんが出るまで、解説書は、「この心というのは「至心」「信樂」「欲生」のことだ」と。「三一問答」やから。「竊かにこの心を推するに」、推察すると、というのは、「至心」「信樂」「欲生」を推察すると、こういう意味なんだと解説されて来ました。ところが曾我量深一人は、「いやいや、違う」と。「竊かにこの心、ちゅうのは信心のこっちゃ」と。（会場：「他力の信心？」）自分の信心のことやと。「自分の信心をよくよく考えてみると、とこういう意味なんだ」と。何故かという、

竊（ひそ）かに以（おもん）みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日（えにち）なり。（「総序」）ちゅうのは、「竊かに考えてみると、自分の信心を考えてみると、本願と光明です」と言つたらう？ だから、ここも、「竊かにこの心を推するに」ちゅうのは、これは「私の信心をよくよく考えてみると、「至心」「信樂」「欲生」に行き当たるんですよ」と、こういう意味なんだと、いうふうに曾我量深が言いました。

それはさっき言ったように「総序」も「後序」もここも、全部三つ同じことを言つとるからだということがあるから曾我さんはそういうふうに言ったんだと思います。まっ、それもちょっと知つていて。知つとくとちょっと教養があるかな。（笑）というよりも、実践の仏教というものは

そういうもんです。自分の信心を抜きにして「至心・信樂・欲生」を考えたら、それは觀念だろう。考えた仏教だろう。そんなんじゃねえんだと。私を救ったこの信心をよくよく考えたら「至心・信樂・欲生」がはたらいとるはずやと。ここにあるんだと。信心の中にあるんだと。それが実践の仏教だという意味です。そやね。そういう意味ですよ。

それで、

仏意測（はか）り難し、しかりといえども竊（ひそ）かにこの心を推するに、

仏さまの心は推測しがたいんだけど、竊かに今この私を救った信心をよくよく考えてみると、

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染（えあくわぜん）にして清淨の心なし。虚仮諂偽（こけてんぎ）にして真実の心なし。ここをもって如来、一切苦惱の群生海を悲憫（ひびん）して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、一念・一刹那も清淨ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清淨の真心をもって、円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまえり。

「円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳」というこの「至徳」というのは名号ということよ。円融無碍・不可思議・不可称・不可説のはたらきを摂め取った名号を完成させてくださった。

如来の至心をもって、諸有の一切煩惱・悪業・邪智の群生海に回施したまえり。すなわちこれ利他の真心を彰（あらわ）す。かるがゆえに、疑蓋（ぎがい）雜（まじ）わるることなし。この至心はすなわちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。（東聖典 p 2 2 5、西 p 2 3 1、島 p 1 2 - 6 8）名号に依っておこるんだと。ここはわりとすんなりした文章です。

最初は「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清淨の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。」ここまでですね。法蔵菩薩は、一切の群生は生まれてから今に至るまで「穢悪汚染」、煩惱に汚され、汚れて、結局娑婆で傷つけ合って生きて行く。そこには、人間の中には清淨の心がないと法蔵菩薩が見抜いたわけです。そして、「虚仮諂偽にして真実の心なし」と。「虚仮」というのはわかりますね。嘘偽り、媚びへつらい、いつも嘘ばかりついて真実の心なんかないと。そして、「ここをもって」、この接続詞にちょっと印を付けてください。法蔵菩薩が今申し上げたような、衆生に真実がないと、こういうことだから私が菩薩として修行するときすべて真実の心で修行しましょうと、こういうことやね。だからここは真実の心がない衆生と、それに対して真実の心を持って修行して行きますよと。それが至心の意味なんだと。

「仏意釈」というのは、いい、さっき言うたように「至心」も「欲生」も「信樂」一つに収まるんやと。だから信心一つでいいんやと、こう言いましたね。それならばなぜ「至心」「信樂」「欲生」という順番で仏さんは説いてくださらないといけなかったんですか？ こういう意味よ、「仏意釈」ちゅうのは。一つでいいんなら最初から一つなんだから。それならばなぜ「至心」「信樂」「欲生」と順番に「至心」が一、「信樂」が二、「欲生」が三。なぜ一、二、三という順番で説いてくださったんですかと。それはまず、「至心」ちゅうのは人間に真実心がないと見抜いたから私が真実の心を持って修行しますと。これだけのことなんやけど、それは体験的に言うときき言うたように、私達が仏教に触れた時に、一番最初よ、教えに触れた時にね、本願の教えがこの身を貫いたと。

またいらんこと言うようやけど、本山から出たような本を読んでもさあ、「阿弥陀如来は尽十方無碍光如来としていつも私達を照らしています」とか、そんなことを書いとるわけや。本当かあ？ そんなもんおまえ新興宗教と一緒にゃねえか。仏さんなんかどこに尽十方無碍光如来で光り照らしとるか。そうじゃなくて、いいか、本願の教えをよおく聞いて、例えば、教えを聞く時はたいがいドツボにはまっとる。だからこんな地獄みたいな世界はもう嫌だと、一生懸命仏法聞いて初めて「ああ！」、そんな時には「こんな地獄みたいなことが起こるのは、あいつが悪いからや」とか「こいつが悪いからや」とか、目が外に向いとるから外のことばかり考えとろうが。そして「もう俺がこんな目に遭うのはあいつがおるからじゃ、殺してしまえ」みたいなことが起こるわけや。で、外に向いとる目が、仏さまの教えはいつも僕が言うように、地獄・餓鬼・畜生が無いようにというところから始まる。いつも言うように、仏さまの世界に地獄・餓鬼・畜生があったら仏さまの世界じゃないわね。だから地獄・餓鬼・畜生はそっち側にあるんやぞちゅうことを教えとる、最初から。そうすると、そっち側にあるちゅうと、「そうそう悪いのはプーチンとキムジョンウンじゃ」みたいな（笑）、そんなふうにもまた思うわけさ。まさか自分の中に地獄の本があるなんて思わへんで。ね。それを、よおくよく聞法してて、苦しい苦しいと聞法してた時、初めて「ああそうか」と。「地獄・餓鬼・畜生を作ってるのはこの自分の負けん気や」と。「負けたくねえ」ちゅう根性が「絶対許せん」という人を作った。そんなふうにして初めて、この自分の自我というところに地獄の本があると教えられたんさ。これ逆立ちしてもわからんぞ、人間が。東大いっても京大いってもわからんことを仏さまが五劫の昔から見抜いとったんだと。だから初めて本願の言葉が光という意味を持って尽十方無碍光如来になるんさ。あるのは本願の教えしかなかろうが。僕らが読むのは。その読んだ教えが身を貫いた時に光になるんさ。だから光があると、初めて五体投地するんさ。その時に「如来は真実である」。「地獄・餓鬼・畜生を作ってたのは私なんだ」と。「申し訳なかった」と言っただけで懺悔（さんげ）しようが。それが第一だから、「至心」は懺悔を後ろにはらみながらこういう註釈を付けている。

そうさ、体験的に言えば「仏さんに遇った！」ちゅうのはさあ、「仏さんの教えこそ真実だ」。そして「自分のようなこんな者が偉そうに生きて来て申し訳ない」ちゅうことがまず第一やろうが。それが「至心」のはたらきなんだと。この時に初めて如来の教えが真実だと思えて、そして尽十方無碍光如来と、仏さまになった。そこに本願が成就してるわけさ。因の本願が仏になってるわけさ。なってるのはこっち側がならしてんだからね。それがなくて「尽十方無碍光如来がいつも私達を照らしています」。「嘘つくな！」と。「誰かこんな文章書いたのは？」と僕はもう腹立つけど、僕がそういうこと言うとまた問題になるから、「はあ、（会場笑）そうでありますか」と。こういうとこ来てもううつぶんさらしとるんです、まあ。（会場笑）やあそうでしょう、言っどることわかるやろう。そんなバカなことないでしょう。

本願の教えが身を貫いた時に「尽十方無碍光如来」になるんさ。そうやね。その時に初めて仏さまが真実である。そしてこちら側にどっこも真実がなかった。それをここに信のところで、仏意は測り難いけどまず第一に「至心」を誓ってくださったのは、「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚偽諂偽にして真実の心なし。虚偽諂偽にして真実の心なし。ここをもって」、法蔵菩薩が兆歳永劫の修行においてひと時も真実でない心ではなかった。全部真実の心で修行してくださった。だから私達はまず「南無阿弥陀仏」と、真実なるものに頭が下がるんすと言っどることになります。よくわかるやろう。うん、ようわ

かるはずや。あのう、まあいいや、いらんこと言わんで。

それは、ここに、その次に、あつ時間か、もうちょっとな。225ページのところに、ここに、『大経』の「勝行段」の文章が出て来ます。ここは皆さん、何遍も読んだぞ、僕は。

不可思議兆載永劫において、～ 欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず、欲想・瞋想・害想を起さず。色・声・香・味の法に着せず。忍力成就して衆苦を計らず。

(西 p 231～、島 p 12-68、『大経』: 東聖典 p 27)

「欲覚・瞋覚・害覚」ちゅうのは「貪欲・瞋恚・愚痴」やから、ね。私達の貪欲・瞋恚・愚痴と全く反対の汚れない真実の心で修行してくださったと『大経』に書いてるでしよと、これを経証として持って来てのよ、親鸞聖人は。『大経』の「勝行段」にこうあるでしよと。お釈迦さまが説いた通り、私達は貪欲・瞋恚・愚痴の心で娑婆を作つとるんだけど、それを超えさせるために法蔵菩薩は「欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず、欲想・瞋想・害想を起さず」、私達と全く反対の真実心に依って兆載永劫に修行してくださった。その言葉が身を貫いた時に、さっき言ったように、こちら側から言えば「どこにも真実がありませんでした。あなたこそ真実です」と。そして「如来です」と。「頭が下がる」と。こういうことになるわけです。だから「勝行段」のこの文章を持って来て、

少欲知足にして、染(ぜん)・恚・痴なし。

これは貪欲のとこやね。貪欲のところ。「少欲知足にして、染・恚・痴なし。」法蔵菩薩は欲を少なく足ることを知って、そして「染」、煩惱に染まることも、それから瞋(いか)り、貪欲・瞋恚、それから愚痴の心もない。

三昧常寂にして、智慧無碍なり。

法蔵菩薩の覚りはしずかにして、無碍の智慧に依って満たされている。

虚偽(こぎ) 諂曲(てんごく)の心あることなし。

嘘、偽り、へつらい、私達のような心が全くない。

和顔愛語にして、意(こころ)を先にして承問(じょうもん)す。

やさしい顔をして、やさしい言葉を使って、皆さん、まわりの人にやさしい顔、やさしい言葉をかけて「意を先にして承問す」。

うん、これはね、私達は何を求めているかは本当はわかっていません。どうこれは？ その都度その都度あるぞ、金やったり、時にはきれいな人に惑うたり(笑)、その都度その都度さ、いろんなことが大事だと思うて生きて来たぞ。ところが誰も、仏になることが本当の願いだなんて思っていない。仏になることというのは、比べる必要のない者になることと考えてもいい。比べないでいい者になりたいなんて誰も思っていない。思っていないけど法蔵菩薩はそれをちゃんと心得て、そして、「あなたが求めているのは本当は、比べる必要のない者になりたいということですよ」ということを教えてあげるという意味や。「意を先にして承問す」というのは。

ね、言うのわかる？ 仏法ってそうでしょ、仏法ってそうやなあ、最初から。僕は松原さんに会うまでは金持ちになりたかったんや。あんな腐った寺に生れたから。貧乏はいやじゃと思うて。それからやっぱり有名になりたいとか、そらいっぱいあるで。そんなことばっかりしかなかったさ。そやけど、あの人に遇うて、「この人のようになりたい」と思うたさ。「この人のように」ちゅうのは、威張らず、いつも威張らない。それから卑下しない。いつも自分らしくて、そしてどんな人とも平等に生きて行く。それから「世自在王仏」さ。つまり世を超えてるちゅうか、死

をも恐れなかった。死の前に立っても「生きることも死ぬことも仏さまにいただいたものでありますから」って堂々としとった。「ああこの人のようになりたい」。そこに世間の今まで求めてたことが何の意味もなく、違うということがわかった。「私が私になればいい」「比べる必要がない者になればいい」。それが本当に求めとったことであつたんだ、それが仏になるちゅう内容なんだちゅうことは松原さんに遇うた時にわかつたさ。

そんなふうに、僕らは本当は何を求めてるか全然わかつてない。それがちゃんと法蔵菩薩が見抜いて先にわかつて教えてくださるんですよと。こういう意味です。

勇猛（ゆみょう）精進にして、志願倦（ものう）きことなし。専ら清白（しょうびやく）の法を求めて、もって群生（ぐんじょう）を恵利しき。三宝を恭敬し師長に奉事（ぶじ）しき。大莊嚴をもつて衆行を具足して、もろもろの衆生をして功德成就せしむ、とのたまえりと。已上

これが『大経』の「勝行段」ですね。そうすると「勝行段」では宗祖がここで引いて来たのは、ちゃんと經典に説かれているように私達の貪欲・瞋恚・愚痴と全く反対の心、真実の心で兆歳永劫の間、修行して救おうとしてくださつたんですよと。それを「至心釈」のところでこういうふうに言い直しているわけです。

それから次のページ（東聖典p226）も、ここも『如来会』の今と同じところを引用しています。それから、その次も善導大師の今と同じ趣旨のところを引用しています。こんなふうにして「至心」と。なぜ第一に「至心」を仏さまが誓ってくださったかということ、それは私達のどこにも真実がないということを知らして、そして五体投地して南無阿弥陀仏と頭を下げる者にさせたために法蔵菩薩は「至心」のところで「真実心」を明らかにしてくださったんですと。それが仏教の出発点ですよという意味で、まず第一に「至心」を説いてくださったんだと、こういうことになります。よくわかろう？

「名号に帰す」ちゅうことはそういうことやろう？ ね、だから「名号に帰す」ということを体験的に言えば、「名号に帰す」という体験は「至心」から始まるから、礼拝から始まるから、「懺悔」（さんげ）という言葉があんまり適当でないのなら「礼拝」でもいい。五体投地やね。礼拝。自分の身にどこにも真実などありませんでしたと礼拝する。そこから始まる。だから「至心」が第一に説かれているんですと。こういう意味です。

今日はちょっと時間が食っちゃったけど、わかるでしょ、言ってることは。一応今日はここまでにしときますが、何でもいいよ、質問ある？

質疑応答

田畑先生・・・質問があればちょっと手を挙げて、マイクを…

質問者1・・・先生ありがとうございます。先ほど法蔵菩薩というお名前が出て来たんですが、私小さい頃お寺さんでお聞きするときは如来さまとか仏さまで、その後もずっとそれで来たんですけど、あのう、なんかいざ、私がもうどうもこうもならないというような時は法蔵菩薩というお名前

の方が適しているかなあて、今日のお話でちょっと感じたんですけども、如来さまに救われるというのと法蔵菩薩に救われるという違いと申しますか、その辺を教えてください。

先生・・・はあ、あのう、法蔵菩薩というと「四十八願」です。如来というと「尽十方無碍光如来」です。光です。ですから私達は先ほど言いましたように聞法しますね。私達の出発点は聞法ですから、そういう意味で四十八の本願の意味をよく聞く。法蔵菩薩の因位（いんに）の教えを聞く。因位の教えを聞いて、その因位の教えにうなずいた時に法蔵菩薩が果の仏さまになってくださる。「尽十方無碍光如来」になってくださる。そこに今度は「尽十方無碍光如来」の救いが実現してくださる。というふうに、因と果と二つに分けて説いたのは曇鸞という方が初めてです。ね。しかし今言うように、救われるということをごちゃごちゃにしていれば「誓願不思議に救われる」でいいわけです。ね。ところが、あそこも「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」（『歎異抄』第一条）とあるでしょう。あれ、理屈から言うたらおかしい。「弥陀の誓願」じゃない、あれは「法蔵菩薩の誓願」のはずです。ところが「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」と。この因と果が実現してるから、わざわざ「弥陀の誓願」と言っている。それは因の教えに依って果の「尽十方無碍光如来」が実現したんだということをふまえて「弥陀の誓願」というふうに言ってるわけですから、因と果というふうに分けて考えた時には、聞法は因の本願の教えを聞くこと。そして初めて頭がさがった時に、果の「尽十方無碍光如来」になって、仏さまが、そして攝取不捨の利益で仏さまが私達を救ってくださる、果の仏さまが救ってくださると。こういうふうに因と果と分けて語っていくところに親鸞の仏教の大変大事なところがあります。分際を間違えるなということ。つまり、私達が救われたからといって私達が仏さまになるんじゃない。どこまでも凡夫として本願の教え、因の教えを聞く。これが私達の分際です。

救ってくださるのは仏さま。果の仏さまが救ってくださる。こういうふうに因と果をきちっと分けたということは、分際を明確にしたと考えてもいいと思いますから、凡夫のまんまで如来になるんじゃないやありません。如来の救いをいただく。だから私達の分際はどこまでも凡夫のままで教えを聞くもんですから、因のところにあるというふうに考えた方がいいと思います。

質問者 1・・・ありがとうございます。

先生・・・ほかになんかないかあ？

質問者 2・・・今日はありがとうございました。先回のお話の中で、『観経』の信心、二種深信と『大経』の信心のことをお話くださって、『観経』の信心というのは人間の、何ですか、相対的な思考に合わせて説いてあるというようなところはわかったんですけど、その後、先生が「二種深信なんて言うと、どうも体験主義に陥っちゃうから、すぐに昔あの先生に遇うとかクソとか言う」（前回、第28回講義録p19～20）って言われたんですけど、そのところ、

先生・・・何て何て？今のところようわからなかった。もうちょっと明確に。

質問者 2・・・体験主義に陥っちゃうから、すぐに昔あの先生に遇うとか言うのと、

先生・・・はい。ああ、はいはい。

質問者2・・・言われた、そこが具体的にどういうことかなと思ってます。よろしくお願いします。

先生・・・はい。これもね、中々微妙な問題なんだけれども、仏法に遇った人はね、やはりある意味で体験主義なんです。先生に遇った。あの先生に遇った。これは体験やね。そしてそれは相対分別の中で考えてしまうから、考え方で言えば『観経』の世界で考えてしまう。師と私が居って、そして師の教えに私が遇ったと。そしてその時に「機の深信」が起こって、「法の深信」によって助かったと、こう考える。で、その考えることは間違いではないけれども、今どうなの？って言われると、うん、先生に遇った時に帰って考えるとよくわかると。そういう人が多いやなあ。今の信心というよりも、先生に遇った時のところに帰って考えるとよくわかります、というのが体験主義になっちゃってる。

いいか、本願というのは今はたらいっている。『大経』の本願による信心は今はたらいてるから、体験主義を超えている。今ここで煩惱の身のまんまで仏さまの本願に生かされている。それが嬉しい。こういうふうに言う『大経』の言い方と、『観経』の考えて言う言い方とは少し違ってしまふ。うまく言えんけど。うん。だから、頭でどうしても、仏教がわかったとこう言うと、どうしても頭で考えて、それを後付けしようとするから、どうしても『観経』で考えてしまう。分別の中で。そして結局は、いや、先生のところであんときわかったんですとか、あんときのところに帰るとようわかりますとか、ほな今は？と言うと、いや今はちょっとどうかもやもやしていますとか、わけのわからんことを言う。そうじゃなくて、このもやもやしているまんまで、大悲の中にあるんだと。この本願というのは、今、今、今、今。ということを実現するという意味で、本願というところに、師に遇ったということをもう少し展開して、本願に遇ったんだと親鸞は言った。

そして、本願に立つんだと親鸞は言った。そこまでいかないと、このどうしても体験主義になっちゃう。あの先生は立派やとか、あの先生が偉いとか、あの先生に教えてもろたんやから、あの先生が先生がということになっちゃう。そういうことを言おうとしていました。

質問者2・・・ありがとうございます。

先生・・・言おうとしていました。考えてみてください。

『大経』の信心は「今日（こんにち）、天尊」と言おうが。「今日、世尊、奇特（きどく）の法に住したまえり」。いつも今日。うん。今このまんまで仏さまの世界に在る。これが嬉しいんだと、たまらんじゃないかと、この暑いけど。これがいいんだと。こういつもそう言っていける、そういう今を確保するのは、本願の信心だと。

『観経』の観念の信心になると、それが体験主義のようになっちゃうから、それを超えなさいというのが『大経』の大事なところですよ。まっ、考えてみてください。

先生・・・他に何かありますか？

質問者3..えっと、その体験主義という問題ですけど。先生にお会いするというのは、先生という個人にお会いするのではなくて、先生の生かされておる世界にお会いするというか、そういう、それはご本願にお会いするということやないかと思うんです。

先生..うん、そうです。

質問者3..だから今日の先生の、信心でなぜ救われるのか、なぜ覚れるのかと。信心の中には法蔵菩薩を通じて覚りが全部詰まっているわけですね。

先生..はい、そうです。

質問者3..だから、その生かされている世界というものに合掌するということが、本当に先生にお会いするということがじゃないかと思うんですけど。

先生..その通りです。

質問者3..そういうふうに理解してよろしいでしょうか？

先生..ええそうです。その通りだと思います。基本的にはその通りなんです。

ところが、聞法し、こうやって聞き、人の前で話し、説明する、そんなことを重ねとるうちに段々段々、その遇うたことが観念になってしまって、いつの間にか考えになってしまって、そうになると、せつかく遇うたこの生き生きした躍動的な嬉しさが消えちゃって、そして何かこうもやもやしたものが残ると。これが聞法生活が引き起こす大問題やね。それを今度は二十願の機のところでもう一回超えて、第十八願の世界に今在るんだということを回復し直すと考えてもいいと思う。そんなふうにして獲得したものを観念化しないで、いつも信心の溝をさらえなさいと蓮如が言うように、いつもいつも、今今というところに立ち帰っていくような原理が本願というところにあるんだと思いますから、その辺を大事に一度考えてみたらいかがですかね。

質問者4..先生本日は本当にありがとうございました。神奈川県の方から参りましたんですけども、お話を伺って本当に良かったと思います。で、実際に読みまして、いろんなお聖教とか読んで、たとえば「至心・信楽・欲生」とかそういうことももちろんよく目にするわけですけども、法蔵菩薩が本当にもう衆生は救われないと、で、自分が他力の信心になるんだって言って「至心・信楽・欲生」っていうふうに、そういう心を起こして下さったっていうのが本当にこう何かものすごくよくわかるお話を伺って、「ああそういうことなんだ」というふうな形で思うことができまして、すごく何か色んな意味で「あっそうかそうかそうか」って納得することができたと思います。

で、それと大宮の方でもお話になっているということですが、それはどちらのお寺さん？

先生・・・ええ光照寺という寺でね、光、照らす。

質問者4・・・あっ光照寺ですか。わかりました。

先生・・・池田君のところですよ。先代のお父さんが中々熱心な方でね、

質問者4・・・そうですね。

先生・・・お元気な時にどうしてもと言って私を要請して、癌で死んじゃったんだ。

質問者4・・・そうですね。うんうん。

先生・・・あの寺ですよ。

質問者4・・・はい、わかりました。ありがとうございます。

先生・・・あの、今おっしゃってくださったことを、もう少しこの次に詳しくお話しますけれども、「勝行段」というのははさっき読んだ短いところ（東聖典p26～27、科文番号31）。『大経』の「勝行段」では、身を捨てたとか、そういうことがわからないわけです。そして最後には六波羅蜜の行を行じたと書いてます。『大経』の「勝行段」は。

ところが親鸞は「勝行段」で法蔵菩薩が五念門の行で修行したんやと、『入出二門偈』ではそう書いてます（東聖典p461～462）。昔から私は、「言葉の読み替えくらいはいいけど、「六波羅蜜の行」を「五念門の行」だと言うのは、そらお釈迦さまの経典、そんなことしたらあかんやろ」と。まあ、そうしたというんなら、それなりのよほどの理由がないとおかしいと思ってましたけども、ああ確かに『論』・『論註』の中に「不虛作住持功德」で仏さまの光明に遇って、そして自分は菩薩として仏さまの世界を実現したいと言って浄土から出て来ると。そして出て来てずうっと修行を重ねていくというのが還相回向の文章として「証卷」のところからずうっと長い間出て来ます。あれは表向きには還相の菩薩です。しかしよく読むと「従果向因」。覚りから降りて来た菩薩のはたらきです。

あそこをずうっと読むと、あれややこしくて変なとこなんですけども、僕は読めなかった、あれはね。だから博士論文書いたときには十分に読めなかったんだけど、小樽で講義してるときに、やっぱ仏さんが降りて来て、「ああここを法蔵菩薩と読んだんだ」ということがはっきりわかりました。そこに最初は「障菩提門」、菩提心を「障りになる」、「それを超える」（「障菩提心を遠離するなり」『浄土論』）と言って、貪欲・瞋恚・愚痴から始まるわけですよ。そして最後には「妙楽勝真心」（みょうらくしょうしんしん）という信心になって、そして「私はもう身を捨てる」ということが書かれているわけです。なるほどここを「勝行段」と同じ意味に読み取ったんだと思って、講義の途中で感動して号泣してしまいました。

あそこから「勝行段」の意味をもっと深くもっと詳しく、そしてもっと精密に曇鸞は説いてきてくださった。だから「六波羅蜜の行」じゃなくて「五念門の行」と読み取って、法蔵菩薩は

「五念門の行」を行じたんだと宗祖が言うんだということがよくわかりました。あれは意味を替えたのではなくて、意味を深く広く正確に曇鸞が教えてくださったと読み取ったんだと思います。え、そこはこの次お話しします。

田畑先生・・・ほかにございますか？

先生・・・いいですか？

質問者5・・・すいません。あのう、時間があるようですんで一つ質問させていただきたいんですが、今日の言葉を講義で今はまあ半分ぐらい覚えてるんですが、門を出たらもう悲しいかな70過ぎでもう全部忘れてしまうんで、あの、何でも、ちょっと違うかもしれんけど、簡単な理解で帰りたいといつも思ってるんですけど、先生その「三心一心問答」っていうのは、仏の心は一心一つでいいんだけど、それじゃもう私達がだれもわからないんで、それを三つに分けて「至心・信楽・欲生」と一つずつ説明して、至心の説明、仏さまの心を説明されているうちに、私の心と違うわということに気付かして、気付かせるというはたらきのために三つに分けてるんだと理解してよろしいんでしょうか？

先生・・・違います。なぜ仏さまが「至心・信楽・欲生」という順序で説いてくださったかと言うと、至心にはまず、真実になってあなた達には真実などないということを徹底的に知らせること。そこから始まる。それは、最後には仏さまは涅槃の覚りを手渡したいということだから、そこから始まってね、だからこの「三一問答」は、君が今言ったんやったら、仏さまの「至心・信楽・欲生」の解説なんですかこう言ったけど、解説ではなくて如来大悲の推究。なぜ私のような者が救われたのか、それは仏さまがまず「至心」と誓ってくださったからです。そこに仏さまの大悲がはたらいているんだと。そして、その次に「信楽」「欲生」と、これはもう大悲がどんどん深まって行って、最後にはこのどうにもならん私を丸ごと救うという、この仏さまの大悲というものは何と大きいことかという意味で、ここの「三一問答」が開かれているんであって、解説しているわけではありません。という意味です。

質問者5・・・先生その、解説することによるはたらきって言ったんですけど、先生は。解説することで私に何かを気付かせるはたらき？

先生・・・うん、何でもいいわ。(会場笑) ともかく大悲の推究だと考えてください。つまり親鸞にはもう最初から「何でこんな自分を救ってくれたのか、不思議でしゃあない」と。そして「ありがたくてしゃあない」と。「これは一体どういうことなんや」と。「こっちにはそれに応えるものは何にも持ってないのに、どうしてこんな私を救ったの？」っていうその不思議さ。それは結局、仏さまが手順を追って、大悲を実現するためにこういう手順を追って、自力から他力に導いてくださったんだというふうに、大悲のはたらきを推究してるというふうに考えてくださいと言うも、そうなんや。そうなんや。

それをこう頭で理解しようとする、何かこう、妙なことを解説している。「三が一だと、こう

言ってるんだなあ」と。こういうふうになるわけです。それは違うんだ。ね。なぜ私のような者に涅槃のはたらきまでが実現するのか。こんな不思議な、「誓願不思議」「名号不思議」「仏法不思議」。こんな不思議なことがあるか。それは全部如来の方に理由があるから、その理由を大悲の現動、大悲がはたらき出てくださいとというふうに、一生懸命伝えようとしているのが「三一問答」であり「三経一異の問答」であると考えの方が親鸞に近いというふうに思います。

簡単に持ち帰ってはいけません。(会場笑)

田畑先生・・はい、丁度時間ですのでひとまず終わらせて頂きます。どうも先生ありがとうございました。

先生・・どうもありがとうございました。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

(恩徳讃、終了)

【テープ起こし】：田中志津子さん、都瑠仙一さん、江本真人さん、
伊藤育代さん、熊谷明美さん、山本泰久さん、住職

【添削】：住職